



こどもをみるまなざし

年齢の大きい子どもが、小さい子どもに優しく接してほしいと願う親や保育者は多いと思います。でも、大きい方の子どもに、遊びの見通しやこだわりがあった場合、それを一方的に譲らなければならないことはつらいことです。そのような経験は、優しさとは反対に、小さい子は受け入れ難いという感情を育ててしまうことがあるように思います。例えば、砂場で型抜きをしながらレストランごっこで盛り上がっていた年中さんのグループに突然年少さんの男の子が入ってきて、出来上がったケーキをおもむるに足で踏みつけて壊してしまった場面。

- 1、「お姉さんがせっかく作ったのだから壊しちゃダメ！」と嗜める。
- 2、「小さい子だから仕方ないね、我慢しよう？」と年中さんを慰める。
- 3、「今ね、素敵なものを作っているんだって。ちょっと見ていようね」と、様子を見せる。

どの対応も、間違っていないし、あるあるだと思います。でも、この時、私が3、の行動をとった時、年中さんの女の子たちが、別の場所に同じようなケーキを作って、「これは壊していいよ！」と、その年少さんに差し出したのです！保育者が、年少児の遊びへの思いを尊重したことが、年中さんもまた、その子の思いを尊重する気持ちにつながったのだと感じ、心がじんわりあったかくなりました。

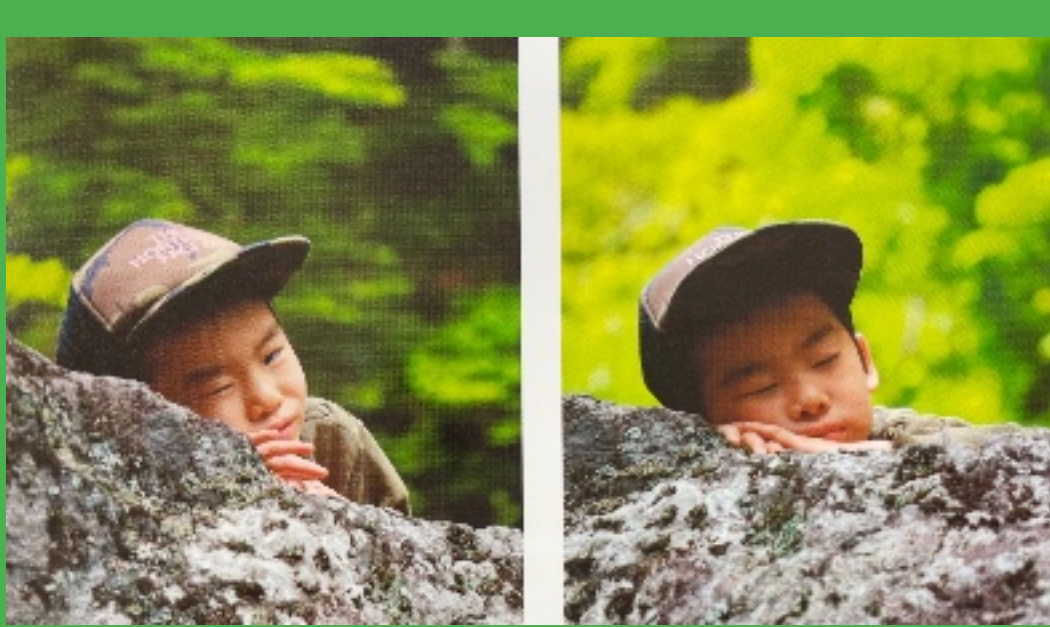
誰にも頼らずに、自分で身の回りのことをできるようになることが「自立」と考えがちですが、本当の意味での「自立」ってどういうことでしょうか？

帰りの自由遊びが始まった直後、Mちゃん(年中女児)が息を切らしながら職員室に飛び込んできました。はあはあしながら「〇くん(年少児)が泣いてる!」。私が泣いている原因を尋ねると、「靴が履けないからお外にいけないって!...私が履かせてあげようと思ったんだけど、上手くできなくて.....」Mちゃんこそ泣きそうになって訴えています。急いでMちゃんと一緒にばんだ組の玄関にいくと、涙でほっぺを濡らした〇くんが確かに靴と悪戦苦闘中!「大丈夫?」早速靴を履かせてあげると、〇くんは一目散に外へ飛び出していきました。〇くんの代わりにMちゃんが「ありがとう」と一言。

思えばMちゃん、年少さんだった今頃はママが恋しくて毎日泣いていたっけ。何をしても先生がそばにいないとダメで....先生の助けが必要で....

もしも保育者が子どもたちに「一人で頑張って!やれば絶対できる!」というような声かけに終始していたなら、困っている人がいても1人でできるようになるまで助けてはいけない、ということを教えたことになります。が、「大丈夫?手伝うよ?」いつでも先生がそばにいる、助けてくれる。そんな環境にいたMちゃんだったからこそ、泣いている男の子を何とか助けなきゃと思ったに違いありません。「できる」「できない」のまなざしではなく、保育者との温かい関わりがあったからこそそのMちゃんだったのです。職員室に駆け込んだMちゃんの勇気の源は「助けなきゃ」という責任感。これは自分が年上としての自覚があってこそその行動でした。

本当の意味での自立とは人が人と関わる中で温かいつながりを通して得られるもの。困ったことがあった時に助けを求めることができる、助けることができる、ということではないでしょうか。自分一人でなんでも出来る!確かにそれは尊いことですが、人と繋がるうとするその温かさこそがとても大切なのだと、Mちゃんに教わった気がします。



ウソが寝たものを幸せにする

この20年以上
森でたくさん出会ってきた
楽しくて 楽しくて
帰りたくないから
森で寝たふりをする子どもたちに
子どものウソは
楽しんでいた方が 大人も子どもも幸せだ
だから、聞こえるように言ってみる
ありゃ〜 まずいなあ
つくし君が寝ちゃったよ...
どうしよう こりゃしばらく帰れないなあ
ふふふ つくし君の目が開いた 小西 貴士

